

ワンドゥギ

キムリョリョン
金呂玲 著 / ベクヒョンハ
白香夏 訳

コリーヌファクトリー合同会社

Wandeuk(완득이)

Copyright © 2008 by Kim Ryeo-Ryeong

Originally published in Korea

by Changbi Publishers, Inc.

All rights reserved.

Japanese translation copyright © 2016

by Coreane Factory LLC

Japanese edition is published by arrangement

with Changbi Publishers, Inc.

登場人物

ワンドウギ

本名ト・ワンドウク。ワンドウギは呼び名。ソウルの外れの坂の上の屋根部屋で、父と血の繋がらない優しい叔父ミンクと暮らしている。友だちがおらず、いつも一人で過ごしている。勉強は大の苦手だが、ケンカはめっぽう強い。

なにかとちよつかいをかけてくる担任教師を「糞トンジユ」と呼んで毛嫌いしている。

糞トンジユ

本名イ・ドンジユ。社会科教師でワンドウギの担任。口が悪く、破天荒な振る舞いで生徒に敬遠されている。ワンドウギの家の隣りにあたる坂の上の屋根部屋で暮らし、ワンドウギになにかと絡む。

ヒョクチュ

ワンドウギのクラスメイト。ワンドウギ同様、勉強は苦手。噂話が好きでクラスでも悪ぶっている。ワンドウギに関心があるのか挑発的な発言を繰り返すため、常にワンドウギの鉄拳制裁を浴びている。

ト・ジヨンボク

ワンドウギの父。生まれながらに障がいがあり、背がとても低い。そのことで

差別を受け続けながら暮らしている。職業はキャバレーの呼び込み兼ダンサー。

ミング

ワンドウギの父が面倒を見ているト・ワンドウク一家の同居人。ワンドウギの父と同じキャバレーでダンサーとして働いている。ダンスが上手く、顔もかなりのハンサム。軽度の知的障がいがあり、話す時にどもってしまう。

チョン・ユナ

ワンドウギのクラスメイト。成績は常にトップクラスの優等生で、ソウル大入學を目指している。美人で意志の強い女の子。ある出来事をきっかけに仲間はずれにあい、一匹狼的な存在のワンドウギと親しくなる。

ハッサン

ワンドウギの家の近くにある教会に出入りしているインドネシア人。外国人労働者として韓国で働いている。明るい性格でワンドウギを見かけるたびに声をかけるが、韓国語はおぼつかない。

館長

うらびれたキックボクシングジムの経営者。

目次

第一部

体罰99回、執行猶予12ヶ月	9
体罰3か月分、分割払い	25
知りません	44
記憶にない母乳	61

第二部

神聖なる教会で	77
ピンクのボロ靴	88

紙一重の差	104
ちよつといいですか？	122
ステップ・バイ・ステップ	136

第三部

ワン・ツー、チャチャチャ	155
つかえてた言葉	182
T・K・O レフリーストップ	216
甘くなかったファースト・キス	251
もういいかい？ まあだだよ	271

第一部

体罰99回、執行猶予12ヶ月

「糞トンジユにいくらもらったんですか？ 僕も稼げるようになったら同じくらい寄付します。だから糞トンジユ、殺してください。お願いします。雷にうたれて死ぬとか、車にひき殺されるのも悪くない。アイツは毎日僕をいたぶり続けるような人間ですよ？ なのに日曜日ここにきて懺悔ざんげさえすればチャラになるんですか？ それはしないでしょ？ それが教会のルールなら、そんなもんは今すぐ変えましょう。間違ってますって、そのルール。今週中に殺してくれなかったら、また押しかけますからね。神聖で全能なる神の御名において。アーメン」

「今日も来たんですね」

たどたどしい韓国語とクセ毛、浅黒い肌と彫りの深い二重まぶた。どう見ても東南アジア系の人だ。ただ、わざわざどこの国の人かと確認したことはない。

この教会に来るのはこれで三度目だが、三度ともここでこの人と顔をあわせてい

る。僕は男を一瞥し、教会をあとにした。

おかしな人だな。男同士なのに（姉妹）なんて呼びかけるやつがあるかよ。糞トンジュのことさえなけりゃ、こんな教会近寄らないのに。

「おや？ どうしたおまえら？ 勉強なんかしやがって。勉強しても無駄だって、俺が言っただろが。あのな、所詮この世の秩序は選ばれし者に決められてんだって。その選ばれた二人ばかりを除けば、あとの人間は単なる数合わせ。おまえらに役割なんてないんだよ」

人呼んで（ヤクザ教師）。担任の糞トンジュだ。「勧めた覚えもないのに、気づけば生徒がヤクザになってた」という逸話の持ち主。「そういうやつは元々そういう人間なんだ」と投げやりな糞トンジュは、つけられたあだ名も意に介さない。

「ワンドウギを見てみる。体格、キレやすい性格、家庭環境。どれひとつとっても、まさにヤクザとなるに不足がない。頭が悪くても人を刺したりは出来るからな。きつと類い稀なチンピラになれるだろうよ。おまえ、ヤクザになって成功したあかつきには、俺に感謝しにこいよ」

糞トンジユのギャグに笑う者はいない。下手に笑ったりしたら、絡まれるのがオチだから。ただ、あんな口をきくわりに、あいつは本物のヤクザについては何も知らないようだった。本物のヤクザ予備軍なら、相手が担任だろうがなんだろうが手加減などしない。僕が本物のヤクザじゃなくて、あいつは幸いと思うべきだ。

僕のことを知る人のうち何人かは、確かに僕のことをへケンカっ早いチンピラ〜と形容する。はつきり言っておくが、僕はケンカっ早いわけではない。人と関わりあいたくないから、基本的に人目につきそうな喧嘩は避けている。僕はただ父のことをへコピト〜と馬鹿にするやつらを叩きのめしてきただけだ。別に父親への愛情だとか、そんなこつ恥ずかしいことに突き動かされているわけではない。単にむかつくから。文字通り本物のへコピト〜である父を馬鹿にしたり、父にかこつけて僕のことまで小馬鹿にしてくる連中が、むかつくからなだけだ。

「なんでうちの高校まで〈夜間自習〉なんてやるんだろうな？ 成績上位のやつだけ集めりゃいいのによ。あー、疲れる。適当に時間つぶして、寝たいやつは寝ろ。終礼はいいから時間になったら勝手に帰れ」

糞トンジユが頭をかきながら教室を出て行った。

僕も少し遅れて教室を出た。

「おい、ト・ワンドウク！ 自習をサボるのは勝手だが、せめて俺の姿が廊下から消えてからにしろ！」

「……」

「見つかつたついでに付いてこい。向かいのクラスのやつが支給品を置いてつたみたいだ。おまえが代わりにもらつていけ」

「……」

「なんだ？ おまえも恥ずかしいのか？ あのなあ。貧乏は恥ずべきことじゃないぞ。飢えて死ぬほうがよっぽど恥ずかしいぞ」

僕にはあなたが担任だという事実のほうが恥ずかしい。

「黙って持つていけ。それと、雑穀米は残しとけよ」

糞トンジユが僕の前を歩く。だからだと歩く後姿は、街のヤクザ連中といい勝負だ。

支給品か。少しは僕のメンツを立てて静かに渡せないものだろうか。家の前にこっそり置いていって欲しいなどという、過度な温情を期待してるわけじゃない。自分

がパックご飯の分け前をもらいたいがために、貧しい家庭の生徒に支給される食料を取りに行かせる姑息さが、いやしくて嫌なのだ。

糞トンジュにつかまったおかげで、僕は夜間自習に戻された上に別の生徒が置いていった支給品まで持ち帰らされる羽目になった。糞トンジュがパックご飯をわけると言うので、捨てていくわけにいかなかったのだ。お祈りにいったばかりなのに、神様は一体なにをやってるんだらう。

玄関の窓から光が漏れていた。父が帰ってきたようだ。水曜日夜十一時一〇分。いつもなら地方にいる時間なのだが。

「父さん、お帰りなさい」

「しょ、しょ、小説家のワンドゥギだ……」

早口の父に代わって、わざわざスローテンポなミングおじさんが返事をしてくれた。

「ミングおじさんもお帰りなさい。それと僕、小説家じゃないよ」

〈韓国語は最後まで聞かないと意味がわからない〉とよく言われるが、僕にはミング

おじさんの最初のフレーズを聞いただけで後の言葉がわかる能力がある。

ミングおじさんはキャバレーにくる女性客の相手をしている。とはいえジゴロではない。キャバレーが雇ったホール担当のダンサーなのだ。先行きの暗いキャバレーをどうすべきか思案した結果、社長が雇ったのがミングおじさんだった。

ミングおじさんのジルバのステップは、いつ見ても軽快だ。このダンスは特性上、少しでも表情のつくりかたを間違えたりステップに間を持たせただけで、ねっとりとしたいやらしい感じになってしまう。でもミングおじさんのダンスは、ダンスのパートナーや見ている人たちまでも軽快な気持ちにさせてくれた。

「お上手ですね。あとでもう一度お相手してください」

「そ、そ、そうしましょう」

このどもり癖が出る前までの話だが。

屋上の小さな屋根部屋に、物がいきなり増えていた。引越しの荷物みたいな青いプラスチックの箱がキャビネットの隣りに積まれている。縦長ダンボールの上部に服をかける棒を渡した父の衣装ケースだ。三つもあるのを見ると、どうやらミングおじさんの衣装ケースも持ち帰ってきたらしい。